

中国語のモーダルマーカ―“必須”における認識的意味の残存 —言語類型論と文法化の観点から—

朱 冰

キーワード：モダリティ 認識的意味 “必須(的)” 文法化 言語類型論

1. 概要

現代中国語の“必須”は英語の *must* や日本語の「なければならない」に相当する強い「必要性・義務(necessity/obligation)」を表すモーダルマーカ―である。朱冠明(2008)による通時的研究では、“必須”は先に束縛的意味(deontic meaning)を獲得し、その後(1)のように「認識的必然性(epistemic necessity)」の意味も生じたが、その認識的意味が清の時代(1644-1912)に消滅してしまい、現代中国語では束縛的意味しか残っていないとされている。

(1) 若 使 某 一 月 日 不 见 客, 必须 大 病 一 月。

もし(使役) ある 一か月 (否定) 会う お客 に違いない 大いに 病にかかる 一か月

「もし一か月お客に会わせなければ、一か月にわたって重病になるに違いない。」¹

(『朱子語類』1270年；朱冠明2008：175)

しかし、清以降の用例、特に近年現れた新しい意味用法の中には認識的意味に近い用例が見つかり、認識的意味が消滅したかどうかに関しては議論の余地がある。本研究は文法化の観点から、言語類型論研究の知見を援用しながら“必須”における認識的意味の残存を考察する。

2. “必須”に現れた新しい意味用法：“必须的”を通して

本節では、まず CCL コーパス²における清以降の“必須”の用例を観察し、現代語では“必須”における認識的意味の残存の可能性を示し、本研究の仮説を提示する。その後、近年現れた“必须的”という新しい表現に観察される「確

信」という新しい意味用法を記述し、「認識的必然性」と「確信」との関連を確認する。

2.1 “必須”の認識的意味

朱冠明(2008)の通時的研究に基づいて、筆者が清以降の“必須”の用例を調査した結果、確かに明確な認識の意味を表す用例はわずかな例が見つかるのみである。また、束縛の意味と認識の意味どちらにも解釈し得る中間的な用例も存在している。

- (2) 如果 这么 做下去, 就是 不 做 外官, 将来 道德 文章, 也
 もしこのようにやっていく たとえ 否定 やる 官僚 将来 道德 学識 も
必須 粗有 成就 的……

に違いない いくらか 成果をあげる 語気助詞

「このままやっていけば、将来官僚にならなくても、道德と学問においてはいくらか成果を上げるに違いない。」

(CCL-清)

- (3) 耕父神 出现 了, 国家 必須 有 祸败的事情 发生。

神様の名前 現れる テンス 国家 に違いない 存在 災い 起こる

「耕父神が現れたら、国には必ず災いが起こるに違いない。」

(CCL-民国)

- (4) 那 乌梁海城 乃 是 一个 要隘, 蒙兵 入 夏, 必須

その 地名 即ち コピュラ 一つの 要害 モンゴルの軍隊 入る 夏国 (束縛認識)

从此 经过, 所以 夏人 在此 拒守。

ここから 経る だから 夏国の人 ここで 守る

「烏梁海城は一つの要害であり、モンゴルの軍隊が夏国に侵入するには必ずここを{経なければならぬ / 経るに違いない}から、夏国の軍隊がここで守っていたのである。」

(CCL-民国)

- (5) 从 96 楼 乘车 出去, 必須 经过 58 楼 门前, 我想 在这里

から 96 番ビル 車で 出かける (束縛認識) 経る 58 番ビル ゲート前 私 たい ここで

把 车 拦住 问一问……

前置詞 車 止める 聞いてみる

「96 番ビルから車で出かけるとき、58 番ビルの前を{経なければならぬ / 経るに違いない}から、私はここで車を止めて聞いてみたい。」

(CCL-現代)

(6) 我经常在 下班前 找个理由早走, 到他回家 **必须**

私 よく 前置詞 退勤する 前に 探す 量詞 言い訳 早退する 行く 彼 帰宅する(束縛/認識)
 经过的一个路口去等他。

経る の 一つ 交差点 行く 待つ 彼

「私はよく言い訳を作って早退して、彼が帰宅する時に必ず通らなければならない / 通るはずの 交差点に行って彼を待っている。」

(CCL-現代)

(2)(3)のように、わずかでありながら清及びその後の民国時代に認識的意味を表す“必須”の用例が未だ存在していることが確認された。また、主観性の観点から見ると、(2)は話し手が自分の考えに基づいて行った主観的な判断で、(3)は「耕父神は災いの象徴である」という人々の既有知識を前提に、「耕父神が現れると、国には必ず災いが起こる」という客観的な必然性を述べている。認識的意味は常に話し手の主観的な判断を表しているものと言われるが、Goossens(1999)が指摘した通り、認識的意味の内部にも「推論可能な必然性(inferable necessity)」という客観的な認識的意味から主観的な認識的意味への主観化が存在している。つまり、認識的意味は必ずしも話し手の主観的な判断に関わっているとは限らず、(3)のように客観的な必然性を述べる場合も認識的意味の一部分として認めるべきだと考えられる。それは(4)~(6)のように束縛の意味と認識的意味どちらにも解釈し得る中間的な用例にも認められる。清以降の用例を調査した結果、ある場所を通過することを表す文脈においてその場所を通過する「客観的必要性」(束縛の意味)とその場所を通過する「客観的必然性」(認識的意味)という二通りの解釈が可能である。³また、認識的意味として解釈される場合、(4)~(6)はいずれも話し手の主観的判断というより、むしろ話し手が客観的状况による必然性を述べていると考えられる。⁴

以上の用例及び分析に基づいて、次のような仮説を提出する。

(7) 歴史上に生じてまた消えたと言われる“必須”の認識的意味は完全に消滅してしまっただけではなく、弱化しているにすぎず、特定の文脈において未だ残存している。

この仮説を裏付ける更なる証拠として以下近年インターネットやドラマに現れた“必須+的”という形式の新たな意味用法について論じる。

2.2 「確信」という意味の獲得

現代中国語では、“必須的”という形式は“必須”が(8)のように日本語の「ノダ」構文に相当する中国語の“是…的”構文に含まれたり、(9)のように“的”を付け加えて連体修飾構造を作って名詞を修飾したりして、「必要性」という束縛の意味を表す際に現れる。

- (8) 何厚铨 表示， 澳门特区 开放 博彩业 是 必然 也 是

人名 示す マカオ特別行政区 解禁する カジノ コピュラ 必然 も コピュラ

必须 的。

なければならない 語気助詞

「マカオ特別行政区ではカジノを解禁するのは必然のことで、そしてやらなければならないことでもあると何厚铨はコメントした。」

(CCL-現代)

- (9) 平日 除去 水电费 房租 等 必须的 开销 外， 只 剩 不 足 80 元

普段 除く 水道光熱費 家賃 など 必要 の 出費 以外 限定 残る 否定 足りる 80 元 的 生活費。

の 生活費

「水道光熱費、家賃など必要な費用を除いて、生活費は80元しか残らない。」

(CCL-現代)

しかし、次のような最近現れた用例は明らかに束縛の意味から離れている。

- (10) 刚刚 用 了 一 下 就 果 断 入 了 一 只。 柚子 味道 好 闻 是

(た)ばかり 使う 助詞 補語 強調 ためらわず 買う 助詞 一本 ゆず 匂いがよい コピュラ

必须的。 而且 柔和 不 刺激 洗 的 干 净。

なければならない そして 優しい 否定 刺激する 洗う 助詞 きれい

「ちょっと使ってみたら、すぐに一本を買っちゃった。ゆずの匂いがもちろんいい。そして肌にやさしくてきれいに洗える。」

(ウェイボ⁵)

- (11) 我 有 把 人 养 胖 的 好 手 艺！ 炒 菜 太 香 了， 哥 哥 姐 姐

私 持つ 前置詞 人 養う 太る の よい 腕前 炒める とても おいしい 語気助詞 兄 姉 不约而同 问 我 以后 是不是 想 当 个 贤 妻 良 母， 是 啊， 这 期 せ ず に し て 聞 く 私 将 来 の で は な い か た い な る 量 詞 良 妻 賢 母 コピュラ 語気助詞 これ

是 必须的， 好 饱 好 饱。

コピュラ なければならない いっぱい いっぱい

「私は人を太らせる上手な腕前を持っている。炒めた料理はすごくうまいから、兄と姉に将来良妻賢母になりたいのと聞かれた。これはもちろんのことだよ。お腹いっぱい。」

(ウェイボ)

(12) A: 根据 一项调查, 挪威航空 成为 最 受欢迎的 五大 廉价航空公司
 によって 一つ 調査 ノルウェー航空 なる 最も 人気の 上位5社 格安航空会社
 之 榜首(略)小伙伴 觉得 这项 调查 准确 吗?

の 第1位 (略) みなさん 考える この 調査 正確 疑問

B: **必须的!** 这 就是 有 免费 无线 的 那个
 なければならない これ 強調 コピュラ ある 無料 ワイヤレスインターネット の あの
 廉价航空 啊!

格安航空会社 語気助詞

「A: ある調査によると、ノルウェー航空は最も人気のある格安航空会社
 上位5社の第1位になっているそうです(略)みなさんはこの調査が間違
 いないと思いますか?

B: もちろんだよ。これは無料 wifi サービスを提供しているあの格安航
 空会社だよ。」

(ウェイボ)

(13) A: 你 会 为 一部 电影 去 补 原著 吗?

あなた (未来) ために 一本 映画 行く 補う 原著 (疑問)

B: **必须的**。为了 更好地 看 电影, 还 可以 长 知识, 《一座城池》
 なければならない ために よりよく 見る 映画 更に できる 増える 知識 映画名
 就 是 最 好的 例子。

強調 コピュラ 最も いい 例

「A: あなたはある映画のために、その原著の本を読みますか。

B: もちろんだよ。よりよく映画を見られるだけではなく、知識も増える。『お城』は最もいい例だよ。」

(ウェイボ)

(10)~(13)における“必须的”はいずれも「なければならない」といった束縛的意味を表す表現や「に違いない」「はずだ」といった認識的意味を表す表現に訳せず、「もちろん」や「当然」のような表現に訳するのがより相応しい。具体的に、(10)では話し手が洗剤のいい匂いに対して肯定の態度を示している。(11)では、話し手が自分の腕前についての自信を示している。(12)(13)では相手の質問に対して話し手が肯定の答えをしている。つまり、ここでの“必须的”は、

“必須”にもともと存在している束縛的意味や認識的意味と異なって、英語の *certainly* や *of course* のように話し手のより高い主観性を示す「確信(certainty)」という意味で使われていると考えられる。

これまでのモダリティ研究では「確信」の意味を「認識的必然性」の一部分として扱うものが多いが(例: Coates 1983, Bybee et al. 1994, van der Auwera and Plungian 1998)、Palmer (2001:35)は「認識的必然性」を表す *must* と副詞 *certainly* や *definitely* を明確に「推論(inference)」を表す表現と「自信(confidence)」を表す表現に区別している。つまり、*must* は利用できる情報に基づいた推論を表すものであるのに対して、*certainly* や *definitely* は発話内容に対する自信を示すものとし、厳密に言えば前者のみがモダリティ体系に属すると主張している。以上の例文から、「確信」の意味は「認識的必然性」より主観化の度合いが高く、両者は明確に区別できるため、“必須的”における「確信」を表す意味用法の成立を認めるのが妥当だと考えられる。なお、「確信」は「可能性」と「必要性」を中心とするモーダルの意味領域において周辺的なものであるが、話し手の態度を伝える点から考えれば、(広い意味での)モダリティに属すると考える。ただし、“必須的”の用例から見れば、「確信」と「認識的必然性」の用法がいつもはっきりと区別できるとは限らない。例えば、(14)では(10)~(13)と同じように「確信」の意味として解釈できるが、話し手Bは話し手Aの発話に基づいて「平潭はこれから必ず人気のある観光地になるに違いない」と推論していると解釈することも可能である。つまり、“必須的”においては、「認識的必然性」の解釈も可能であり、「認識的可能性」と「確信」の用法の間に連続していると考えられる。

(14) A: 现在 好多人 旅游 都 去 平潭 玩 啊, 平潭 是 要
今 大勢 人 旅行する みんな 行く 地名 遊ぶ 語気助詞 地名 強調 だろう
火 了。

人気になる 語気助詞

B: 那 是 **必須的**。

それ コピュラ なければならない

「A: 今、大勢の人が平潭へ旅行に行っているなあ。平潭はこれからだんだん人気になるだろう。

B: それは当然のことだよ。 / 必ずそうなるだろう。」

(ウェイボ)

一方、次のような用例はどちらかといえば、「認識的必然性」を表していると

考えられる。

(15) 自营? 定价 宰你 **必须的**, 遇到 不好的事 找 谁 投诉…

個人(タクシー)料金 人をカモにする に違いない 会う 悪い こと 訪ねる 誰 苦情を言う

「個人タクシー?ぼられるに違いないし、ひどい目にあっても、苦情を言うところもない。」

(ウェイボ)

以上の観察から、中国語のモーダルマーカ―“必須”は“必须的”という形で「確信」の意味を獲得していることが確認された。なお、「確信」の意味は「認知的必然性」の意味に密接に関わる可能性が高いことも分かった。

2.3 “必须的”の談話機能

张海涛(2014: 59-60)では応答表現としての“必须的”の談話機能について、次のような2つを挙げている。

(16) ①ユーモラスな方式で道理上または情理上の必要性を表す。

②ユーモラスな口調で相手の発話内容を承認する。

①については、例えば(17)では张海涛(2014)の主張に従えば、“必须的”は秘書である李さんが「上司が会長に言ったことを内緒にしなければならない」という文字通りの束縛的意味であるが、実際は「かしこまりました」や「承知いたしました」といった表現に相当し、上司の命令に従って、絶対口外しないことを表している。しかし、ここでは「必要性」の意味としては解釈できず、話し手による強い肯定のニュアンスしか残っていない。従って、“必须的”は(16)①「道理上または情理上の必要性」というより、むしろ話し手の肯定の態度を表しているとしたほうが妥当ではないかと考えられる。それと同様に、(12)～(14)では、話し手Bは話し手Aの観点を認めているものの、通常の応答表現を使用せず、“必须的”に含まれる強い肯定のニュアンスを借りて、相手の発話内容を承認している。

(17) 刘大脑袋: 但 今天我 跟 董事长 说的话 哪 说 哪 了, 别 出去

でも 今日 私 前置詞 会長 言った 話 どこ言う どこ終わる (否定命令) 出る

传 去, 听见 没有?

広げる ていく 聞こえる 否定

小李：必须的。

なければならない

(《乡村爱情故事》第三部第 18 集⁶)

「劉大腦袋：でも、今日会長にお話ししたことはここだけの話なんだよ。

勝手に他の人に言うな。分かる？

李さん：はい、かしこまりました。」

(『田舎愛情物語』第三部第 18 話)

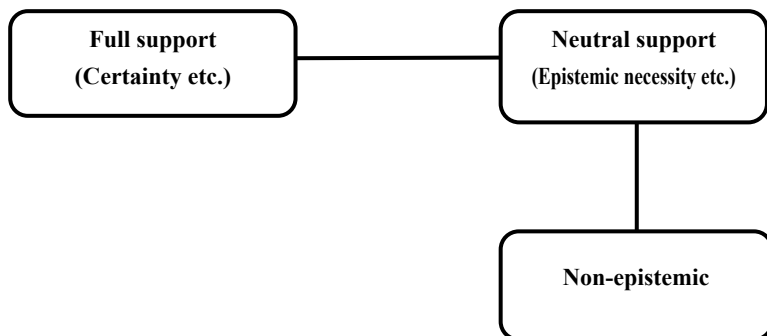
一方、ユーモラスな口調については、本論文は張海濤(2014)の立場と一致する。つまり、話し手が肯定の態度を伝える際に、通常の表現を意図的に避け、“必须的”という強い肯定のニュアンスが含まれる表現を誇張的に使っている。それによって、ユーモラスな効果を表し、お互いの距離を縮めて、雰囲気づくりや関係づくりといった相互行為的機能も果たしており、高い間主観性を示していると考えられる。従って、張海濤(2014)を踏まえて“必须的”の談話機能を次のようにまとめることができる。

(18) ユーモラスな口調で相手に対して強い肯定の態度を伝える。

本節では、“必须的”という表現を通じて、「確信」という新たに生まれた意味を観察した。なお、“必须的”の談話機能についても考察を行った。特に興味深いのはすでに消滅したと言われる“必須”の認識的意味が未だ存在している可能性があることである。では、この認識的意味は一体どのようなものであろうか。「確信」の意味とはどのように関連しているのか。これから第3節では文法化と言語類型論の観点から“必须的”の成立過程の検討及び“必須”の認識的意味の存在を確認し、第4節では日本語の「なければならない」との対照を通じて、これらの問題の解決を試みる。

3. 「認識的必然性」から「確信」へ：“必须的(的)”の意味拡張

本節では「確信」を表す“必须的”の成立過程を考察する。まず、形態・統語の側面から見ると、(10)～(14)では、「確信」を表す“必须的”はコンピュータの“是”と共起する場合もあれば、単独で応答表現として使われる場合もあるので、後者のような“必须的”は“是…的”構文から独立して語彙化されたものではないかと考えられる。⁷従って、“必须的”には「確信」の意味を獲得すると同時に、平行的に(19)のように再分析(reanalysis)が起こっていると推測できる。



(Boye(2012:171) Figure 3.12 に基づいて)

図1 認識的意味の意味地図(一部)

では、具体的に「認識的必然性」はどのように「確信」へ拡張しているのか。文法化の研究では、「語用論的強化(または語用論的富化)(pragmatic strengthening/enrichment)」が文法化の重要な動機付けだと指摘されている(例：Traugott 1988, 1989, Traugott and König 1991, 大堀 2002, Hopper and Traugott 2003)。例えば、*You must be careful.* という文における *must* は、「束縛の必要性」から「認識的必然性」へ拡張する際に、以下のような推論のプロセスを想定することができる。このような推論は使用の場面において強化され、認識的意味も次第に定着している。

- (20) a. You are required to be very careful. (deontic, weakly subjective)
 b. I require you to be very careful. (deontic, strongly subjective)
 c. It is obvious from evidence that you are very careful. (epistemic, weakly subjective)
 d. I conclude that you are very careful. (epistemic, strongly subjective)

(Traugott 1989 : 36(6))

“必須的”における「認識的必然性」の意味から「確信」の意味への拡張も語用論的推論の強化によって動機付けられたと考えられる。例えば、(21)(2.2(13))を再掲では(22)のような推論プロセスを想定できる。「認識的必然性」の意味には話し手の推測が含まれている。通常は、推測を経て、結論にいたり、更にその結論が真であると確信するようになる。「認識的必然性」から「確信」への拡張には推測の過程が次第に背景化し、焦点が結果である「確信」へ移行しつつ

あるというメトニミー的な変化が窺える。

(21) A: 你会为一部电影去补原著吗?

あなた (未来) ために 一本 映画 行く 補う 原著 (疑問)

B: 必须的。为了更好地看电影, 还可以长知识, 《一座城池》

なければならない ために よりよく 見る 映画 更に できる 増える 知識 映画名

就是最好的例子。

強調 コピュラ 最も いい 例

「A: あなたはある映画のために、その原著の本を読みますか。

B: もちろんだよ。よりよく映画を見られるだけではなく、知識も増える。『お城』は最もいい例だよ。」

(ウェイボ)

(22) a. 私が読むだろうと推測する。

b. 私が読むと結論付ける。

c. 私が読むと確信する。

d. (相手に対して)「私がもちろん読む」と明言する。

もし以上の分析が正しければ、“必须的”の前身である“是[必须]的”構文に入っているのは束縛の意味を表す“必须”ではなく、認識の意味を表す“必须”である可能性が高い。従って、“必须的”の成立過程は次のようにまとめられる。

(23) 〈是[必须 epistemic]的〉 → 是〈必须的 epistemic or certainty〉 → 必须的 certainty

4. 終わりに

本論文の内容をまとめると、“必须”における意味変化のプロセスは図2のように表せる。

「束縛的必要性」から拡張した“必须”の「認識的必然性」の意味は歴史の流れの中で完全に消滅したのではなく、常に“必须”に含まれており、そして「確信」の意味の獲得に貢献している。なお、会話において、「確信」を表す“必须的”は「ユーモラスな口調で相手に対して強い肯定の態度を伝える」という談話機能を持っており、高い間主観性を示していることから、「認識的必然性」から「確信」への拡張は間主観化のプロセスと考えられる。更に、この拡張において、語用論的推論と強化が重要な役割を果たしていることも分かった。

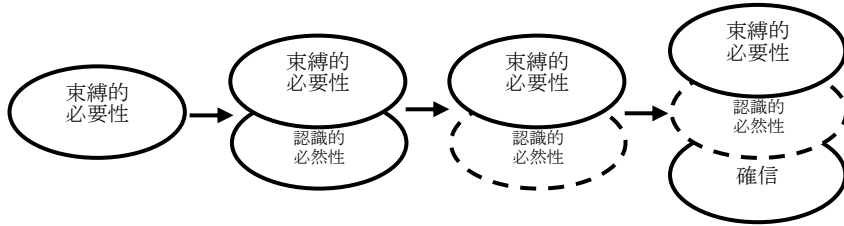


図2 “必須”における意味変化

注

- 1 日本語の訳文は全部筆者によるものである。
- 2 北京大学中国言語学研究センターコーパス; 古典語(書き言葉)と現代語(書き言葉と話し言葉)双方から成る大規模なコーパス(約4.77億字)。
- 3 現代語では“必須”の認識の意味がすでに辞書から消えてしまったので、(5)(6)のような例では束縛の意味しか読み取れないのではないかという疑問が生じるかもしれない。しかし、(4)~(6)のようなある場所を通過することを述べる文脈においては、もともとその場所を通過する客観的な必要性があれば、自然的にそこを通過する必然性があると推論できる。そうしなければ、目的地に到達するには他のルートがないので、実現できない。つまり、このような文脈では、束縛の意味と認識の意味が他の文脈と比べてより密接に関わっている。どちらの意味が優先的に取られるかは、聞き手(読み手)の視点が動作主に置かれるか(束縛の必要性)、それとも命題全体の真偽に置かれるか(認識の必然性)によって決められると考えられる。
- 4 客観と言っても、話し手の主観的関与がまったく含まれていないとは言いがたいが、(2)のような典型的な話し手の主観的判断を表す用例に比べて、(4)~(6)は明らかに客観的な意味に偏っているものである。
- 5 中国語版ツイッター“微博(ウェイボ)”から収集した用例である。
- 6 张海涛(2014)では同じドラマのセリフから収集された例文を使っているが、(17)は筆者が独自収集した例文である(詳しくは朱冰(2013)を参照)。(1)の談話機能については、张海涛(2014)では(17)に似た例文を挙げている。
- 7 例(8)のような“是…的”構文の文末に比べて、例(9)のような連体修飾節の文中位置から“必須的”が独立するのは遥かに難しいと予想される。
- 8 张海涛(2014: 56)は類似した観点を持っているが、「再分析」と具体的に分析していない。

参考(引用)文献

- Boye, K. (2012) *Epistemic Meaning: A Crosslinguistic and Functional-Cognitive Study*, Mouton de Gruyter: Berlin/Boston.
- Bybee J., Pekins R. and Pagliuca W. (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*, The University of Chicago Press: Chicago/London.
- Coates, J. (1983) *The Semantics of the Modal Auxiliaries*, Croom Helm: London.
- Goossens, L. (1999) Metonymic Bridges in Modal shifts, In Klaus-Uwe P. and Günter R. (Ed.), *Metonymy in Language and thought*, 193-210, John Benjamins: Amsterdam/Philadelphia.
- Hopper, P. J. and Traugott, E. C. (2003) *Grammaticalization* 2nd edn, Cambridge University Press: Cambridge, UK.
- Narrog, H. (2008) The Aspect-Modality Link in the Japanese verbal complex and beyond, In Werner A. (Ed.), *Modality-aspect Interfaces: Implications and Typological Solutions*, 279-305, John Benjamins: Amsterdam/Philadelphia.
- Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality*, 2nd edn, Cambridge University Press: Cambridge, UK.
- Traugott, E. C. (1988) Pragmatic Strengthening and Grammaticalization, *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* (1988), 406-16.
- Traugott, E. C. (1989) On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change. *Language* 65.1, 31-55.
- Traugott, E. C. and König E. (1991) The Semantics-Pragmatics of Grammaticalization Revisited, In Traugott, E. C. and Heine B. (Ed.) *Approaches to Grammaticalization* Vol.1, 189-218, John Benjamins: Amsterdam/Philadelphia.
- Van der Auwera, J. and Plungian, V. A. (1998) Modality's semantic map. *Linguistic Typology* 2.1, 79-124.
- 大堀壽夫(2002)『認知言語学』, 東京大学出版会: 東京
- 张海涛(2014)〈“必须的”的形成机制和话语功能探析〉《语言教学与研究》第3期, 55-61
- 朱冰(2013)「文法化の観点から見た中国語モーダルマーカ―“必須”における意味変化―日本語の「なければならない」との対照を兼ねて―」平成25年度日本言語文化専攻修士論文構想発表会原稿, 2013年9月20日

朱冠明(2008)《〈摩诃僧祇律〉情态动词研究》，中国戏剧出版社：北京